

## 聖蹟を慕ひて

佐々光 二

◇ 出 發 何時植えられたのか泉水の中にぼつかり咲いた桃色の睡蓮が、周囲の垂る新緑に可愛い媚を與へつゝ潑刺たる六月の太陽に、にっこり笑ひかけてゐる。初夏！薫風戦ぐ旅行シーズンだ。人々の眼が各驛に汜濫した濃厚な色彩のポスターへ吸収されて行く。私達祖山の學徒もそのシーズンに波に乗つて過ぎし日の偉大な聖者が血涙に咽んだ貴い歴史の跡を尋ね、其處に脈搏つ純正の鼓動へと觸れるべく九日の夜、明るい月光に送られて身延を立つた。

×

◇ 明治神宮 早朝の參道に敷きつめられた玉砂利と、それに沿ふて茂る新緑から醸し出された神々しい雰圍氣は、睡眠不足の脳髓を緊張せしめる。三の鳥居を潜つた時、大帝の聖徳を慕ふ多數市民の敬虔な姿が眼に寫つた。僅か半世紀の中に史上未曾有の鴻業を樹立遊ばされた不出世の聖帝を親の如く慕ふ姿、それは大東京市民の最も大きな誇の姿だ。

×

◇ 池 上

光悦の額「本門寺」の下で改良服に着代へ、賑かな氣配のする境内を通つて大堂へ。

祖師堂を見慣れた眼には余り大きいとは感じないが、その莊嚴の複雑さには驚嘆する。金色眩い佛具が寶龕の前に處せまいまで供へられてゐる。やはり都會の靈地だ、その流行振りが此の一事にも遺憾なく發揮されてゐる。薄暗い大坊、臨滅度の鐘の音が、まだ梁間に漂ふて心の奥底に浸みこんで來さうだ。

x

◇ 中山 帝都を真中に西と東。池上は都塵に浮ぶ靈地であり、此の中山は郊外に座す聖域である。彼は明、此は幽、時代の流れを傳統に縛られた人々は此處に二つの城域を築いた。それが今木陰の參道を歩む私達の腦裏に面白い對象の影像となつて浮ぶ。

鬱蒼とした哭銀杏の茂みから、ひら／＼と二つの葉が散つた、恰も頂尊の矛盾に泣いた心を偲ばしめるかのやうに。

x

◇ 鎌倉 吾等の聖者が血を搾るやうな慈悲と、骨を碎くやうな努力とを盡して奮闘せられた法戦の地……見るもの、聞くもの總てが嘗て學んだ祖傳の鎌倉史を今更のやうに追想せしめ、感激せしめた。辻說法跡、安國論寺、鶴ヶ岡八幡等靈蹟の一つ／＼に力強い梵音が聽えてくるやうな氣が

した。

x

◇ 土 牢 「一草一木皆是れ史蹟の莊嚴なり」雨に晒された小さな立札が、庭園のやうな光則寺の境内から土牢へ行く細い石ころ道にしよんぼり立つてゐた。間口の廣い、奥行の余り深くない洞窟が嚴重な木格子でしつかり鎖されてゐる、これが嘗て幾多の哀史を飲み込んだであらう凄慘な土牢だ。前に茂る名の知らない雜草は、その昔、日朗上人の悲痛な唱題に耳を傾けたかも知れない。

x

◇ 龍 口 山門石段の横、四本の小松に圍まれて、苔さびた五輪の寶塔が立つてゐる。「日蓮が命を捨てた」龍口刑場の跡、傳導者日蓮より菩薩日蓮への大飛躍をせられた開顯の妙地が此處だ。徳川の初期、深草の元政上人が法悦に濡るゝ頬を輝かして詠つた

龍口當年虎口ノ難

電光影裡泰山安<sub>レ</sub>

遺蹤猶在<sub>レ</sub>清沙ノ上

一片ノ秋霜日下ニ寒<sub>レ</sub>

の詩が髣髴と浮上つた。

その夜聖者が呀然たる明月に眺められた片瀬の金波は、濃藍の海にキラリと光る銀波と變つて、回想に浸る私達に呼びかけてゐた。

x

◇富士五山 「不二ひとつ埋み残して若葉かな」その若葉を縫ふて數台の車が走る、梨と枇杷の木に中毒しかけた時、實相寺の山門が見えた。大日本の山富士と安國論執筆の豫言者——この題目は若き私達に大きな暗示を與へた。世界救濟への第一歩が此處で準備されたのだ。

再び車は廣漠たる裾野の夢跡を拾つて走る。夏草の繁りに托した重須の森、其の中に興師の墓が寂しく立つてゐた。そして本堂の前には師嚴道尊の教訓者、泣き石が沈黙を守つて靜かに座してゐた。

大石寺へ。朱の三門、兩側の支院、整然たる堂宇の配列。然し其處には大日蓮華五山と呼んだ往年の雄圖はなく、何處か凋落の影が漂ふてゐるのが感じられた。果して興尊の衣鉢を繼いで教線を擴張する者は誰か。

x

◇身延に歸りて 出發して三日、小さな頭惱は無數の刺戟と感激に痲痺し相だ。が、七十二時間の見聞は私達をして身延を再認識せしめた。矢張り身延は唯一の棲神の法窟である。

(昭八、六、二〇)